
東方零物語

AGITΩ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方零物語

【Nコード】

N8041Z

【作者名】

AGITΩ

【あらすじ】

ベリアル銀河帝国との戦いから一年が経ちビートスター事件を解決し新たにジャンナインを仲間に加えたウルトラマンゼロ率いるウルティメイトフォースゼロ。

アナザースペースに戻り父であるウルトラセブン、ウルトラマン、ゾフィーの言葉に不安を抱き、注意しながらパトロールしているとベリアル軍の残党レギオノイドと遭遇し残ったレギオノイド達はかつて、惑星チェイニーで戦い、倒したはずのダークロプスゼロが別の宇宙へ飛ばしてしまい自らも姿を消した。

戦いが終わり仲間と合流しようとしたゼロは声を聞いた、助けを求め、そしてジャンナインと共にその声を頼りにウルティメイトイージスを使い別の宇宙へ旅立つのだった。

STAGE 01 プロローグ（前書き）

今回はゼロの幻想入りです、ジャンナインも着いてきていますが後々合流予定です。

タイトルはゼロサーガという感じで、ウルトラマンサーガまでの時系列ではなく被せた時系列ですので……チームUは東方キャラ達的な感じでやれたらいいなと思っています。
長い前振りもここまでにして始めたいと。

登場怪獣

帝国機兵レギオノイドβ

ダークロプスゼロ

登場

STAGE 01 プロローグ

ここは我々が住む宇宙とは別の宇宙、アナザースペースである。

この宇宙はかつて悪のウルトラマンであったカイザーベリアル率いるベリアル銀河帝国が蹂躪していたのだが若きウルトラ戦士、

誰よりも、地球人より地球人を愛した男、ウルトラセブンの息子であるウルトラマンゼロとその仲間達がカイザーベリアルとその銀河帝国を倒しアナザースペースにはびこる悪を倒すべくゼロは共に戦った、グレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボットを仲間にしウルティメイトフォースゼロを結成し平和を守るために戦っていた

……

ベリアル銀河帝国の戦いから一年が過ぎ、そして巨大な天球、そのメインコンピュータであるビースターとゼロが元にいた宇宙で戦い、勝利し新たな仲間、ジャンナインを加えアナザースペースに帰って再びウルティメイトフォースゼロとしての活動を続けていた。

「ここいらは異常ないみたいだな」

額に緑色に輝く丸いランプに、頭部に二本のブーメラン、細長い三角を下に向けたような黄色く輝く二つの眼に胸の真ん中に輝く青いクリスタル、

それを中心に肩にも装着されたプロテクター、上半身は青く下半身は赤く銀と青のラインが流れ左腕に銀色で青いクリスタルが埋め込まれたウルティメイトブレスレットを嵌めたこの巨人こそがウルト

ラマンゼロである。

ゼロやウルティメイトフォースゼロの仲間達は各地に散らばりパトロールをしていた。

（それにしても……親父やウルトラマン、ゾフィー隊長達が言っていた不穏な空気って一体……）

ビートスターとの戦いが終わった直後、自分の宇宙を守る宇宙警備隊と呼ばれる組織の隊長であるゾフィー、セブンにその父の同期であるウルトラマンに宇宙で不穏な空気が流れていると言われ気に掛けていた、その事がありパトロールを徹底的に行っているのだ。

「親父達の思い過ごしならいいんだけどな……」

仲間達と合流しようと旋回しようとしたその時だった。

「っ！」

刹那、光弾が無数襲い掛かってきたがそれを右に傾き飛行しながらそれを避ける。

「なんだ!？」

立つように静止し放たれた方向を向き目に入ったのは数機の両手に巨大な青い銃身が伸びる二足歩行のロボットだった。

「レギオノイド！」

それはベリアル軍が大量生産し兵器として使っていた帝国機兵レギオノイドだった、なおこのタイプは宇宙戦型のβである。

このレギオノイドβ達はベリアル軍の残党であり今もなお破壊活動が続いている。

「だいたい20機か………まあいい、相手してやるぜ！」

頭部に装着された二本のブーメラン、ゼロスラッガーに手を掛け、それを握って外しナイフのように持つ。

レギオノイドβは銃口をゼロに向け一斉に光弾を発射、爆発したため直撃したかのように思われたが爆炎の中からゼロが飛び出してきた。緑色の光が走りレギオノイドβ二機はゼロスラッガーにより胴体を切り裂かれ爆発し炎に呑み込まれた。

「ふう、やっぱりレギオノイドはレギオノイドだな」

ゼロスラッガーを戻し左腕を水平に伸ばしてから右腕を曲げ胸に近付け左腕を引いて額のランプ、ビームランプから緑色の細い光線、エメリウムスラッシュを放ちレギオノイドβの頭部に直撃し機能を停止させた。

「ふっ！？ デリヤッ！」

背後から光弾が迫ってきたため真上に飛び立ち、流れ弾は機能が停止したレギオノイドβに直撃し爆散。

「おらあああああつ！………！！！！！！！！」

斜めに急降下し左足を引いて右足に炎が纏わせ放つ飛び蹴り、ウルトラゼロキックを炸裂、レギオノイドβを頭部から貫き撃破すると今度は右手に炎が纏いその状態で放つチョップ、ビッグバンゼロでもう一機破壊。

エメリウムスラッシュを放ったように左腕を水平に伸ばし腕をL字に組むと右腕が光り輝き。

金色の広範囲に広がる光線、ワイドゼロショットで残りのレギオノイドβを一掃しようと放つ、次々と爆発していくが全滅はしなかった、何機か後ろに隠れ盾にしていたからだ。

もう一度ワイドゼロショットを放とうと腕を組むがどこからか竜巻のような光線が放たれ残ったレギオノイドβを呑み込み消滅した。

ゼロはその光線の名を知っていた、放たれた方向を向くとそこにはゼロに姿は似ているが赤く輝く繋がった一つ眼に青は橙色、赤は黒く、

胸は太い砲門が出ていたが収納され肩まで上がっていたプロテクターは下がりクリスタル、カラータイマーで完全に閉じられ、カラータイマーとビームランプは白くなった巨人だった。

ダークロプスとはベリアル軍がゼロに似せて作ったロボットだが、今この場に居るのはゼロの宇宙に流れ着き侵略星人サロメ星人がエ

ネルギー変換装置ディメンジョンシステム、時空移動装置ディメンジョンコアが内蔵されたダークロプスゼロだった。

先ほどの竜巻はディメンジョンコアから放った相手を別次元に飛ばすディメンジョンストームだった。

だがダークロプスゼロはゼロが倒したはずなのだが……

「まさかサロメ星人がまたダークロプスを！」

ダークロプスが何らかの影響で自分の宇宙に流れ着きサロメ星人が回収したのかと考えたのだが。

「俺は貴様を覚えている、ウルトラマンゼロ」

その言葉に先の考えを捨てた。

「なぜ貴様が！」

「教える必要はない」

ダークロプスゼロの眼は輝くとその場から消え去った。

「消えた………だと」

セブン達が警告していた不穏な空気とはこの事なのだろうかと考えを持ち始めていた。

「不穏な空気………上等だ、そんな空気の流れ、変えてやるぜ」

そう呟いた瞬間、助けて、その一言が聞こえてきた。

「誰だ………」

助けて、その一言は弱々しく、だが力強いものだった、心から助けを求めているような。

「ゼロ！」

そこにウルティメイトフォースゼロの仲間である暗い赤と白、横半分に分けたような配色に黄色い眼に胸部に三対に並んだ発光部に腹部に菱形に赤く輝く発光部が付いたジャンナインがやってきた、近くを通りかかり話し掛けたのだ。

「どうしたんだゼロ？」

「声が………」

ジャンナインは自分に備えられた機器を使いゼロが聞いた声を聞き取ろうとするができないのだが。

「機器には何も反応がないのに声が………！」

その言葉の通り、だがジャンナインは確かに聞いた、その助けを求める声を。

「これは………別の宇宙から助けを求める声かもしれない………コイツも感じてるみたいだ」

ウルティメイトブレスレットのクリスタルは強く発光していた。

「ジャンナイン、アイツらに俺は別の宇宙に行くって伝えておいてくれ、俺はコイツを頼りに助けに行く、その声をな」

ゼロが身構えるとジャンナインは彼の肩に手を乗せ。

「ジャンボット達には今さっき伝えた、だから俺も行く」

その際に色々訳を聞かれたと思ったが今は助けを求める声が気に掛かっていた。

「何が起きるか分からねーぞ？」

「百も承知だ、だがお前を信賴している、仲間だからな」

仲間、その言葉を聞き鼻で笑うと。

「じゃあ行こうぜ！ デアッ！」

ウルティメイトブレスレットが消えると代わりにゼロを白銀の羽根のようにも見え胸の部分に菱形の青いクリスタルが埋め込まれ背にクリスタルが埋め込まれた二つの突起物が付いた鎧が装着し、右腕に二つの青いクリスタルが埋め込まれた白銀の剣ウルティメイトゼロソード、それらを合わせウルティメイトイージスと呼ばれる神秘の鎧を身に纏ったウルティメイトゼロとなる。

「じゃあ、行けジャンナイン！」

その言葉に頷くとゼロは白い光りを放ちジャンナインを包むとその場から一瞬にして消えた。

そしてゼロとジャンナインは我々の地球に訪れたウルトラマン達が入隊した防衛チームはあるがウルトラマンは架空の存在、怪獣は現実の存在、そして地球上に存在する別空間がある宇宙に誘われるのだった……………

TO THE NEXT STAGE

STAGE 01 プロローグ（後書き）

ジャンナインが生意気でお気に入りです、ボスが乗ったのにはビックリしましたね。

東方キャラに乗せるのもいいなと考えています、他のウルトラマンも出るかと思いますが、特にゾフィーとメビウスが。

外の世界設定は防衛チームと怪獣がいてもウルトラマンは空想の存在という世界観です。

理由は主に武器とかです。

次回予告

魔理沙

「またロボットが現れたみたいだぜ」

霊夢

「早苗が喜びそうね」

文

「清く正しい射命丸です」

ゼロ

「この宇宙か……」

紫

「来たわね」

アーストロン

「ギャオオウ！」

霊夢

「光の……巨人……」

次回『STAGE 2 幻想郷』

STAGE 2 幻想郷（前書き）

これは結構書き直した話でやっと納得が行く内容に、次回予告とは違う内容となりました。

登場怪獣

凶暴怪獣アーストロン

登場

STAGE 02 幻想郷

ここはウルトラマンがいない防衛チームが活躍する宇宙、そしてあなた方が知る日本のどこかにある人間と妖怪が住む幻想郷という不思議な世界……

これから、あなた方の目はあなた方の体から離れ、ゼロとジャンナインと共にこの不思議な幻想郷に入っていくのです。



「おーい、れいむ霊夢ー！」

幻想郷を外、いわゆる私達の世界からここを隠す為の博麗大結界はくれいを管理する巫女が住む博麗神社。

外にあるような神社と変わらず鳥居や賽銭箱もちゃんと置いてある。

そこに金髪で黒い帽子、白黒の衣服を纏い箒に跨り空を飛ぶ少女、霧雨魔理沙が境内に降りてきた。

境内には掃除をしてる赤いリボンを付け黒髪で紅白で脇が露出した巫女服を着た少女、この博麗神社の巫女の博麗霊夢が立っていた。

「どうしたのよ」

腰に手を当てて目を細めめんどくさそうに聞いてみる。

「また出たんだってよ、例の機械の人形が」

その内容に眉間に皺を寄せ表情を変えた。

最近幻想郷で機械の人形が何体も出現しておりこの世界で実力者達が対処している、その実力者の中には霊夢と魔理沙も入っている。

「そう………」

「まだあるぜ、機械以外にも巨大な動物みたいな奴が目撃されたみたいだぜ」

魔理沙は女性には珍しい特徴的な話し方で次の話題へ。

巨大な？、霊夢がそう言った瞬間、音を立てて地面に降りてきた一人の少女が、帽子を被りワイシャツと短いスカートで黒い短い髪の……

「清く正しい射命丸です！ 号外を配りにきましたー！」

彼女の名前は射命丸文、この幻想郷にある妖怪の山に住む鴉天狗、つまり妖怪で文々。（ぶんぶんまる）新聞を発行している、

朝刊とかよりも号外が多く事実だが盛り過ぎて嘘のような記事になることがよくあるが裏が取れない事は記事にしないため本当である。

「また号外？ 号外ばかりの新聞ね」

「ちょうどいい時に来たぜ文」

「ん？」

文の肩にぶら下げたカバンの中から新聞を抜いてそれを開く魔理沙。

「この記事、あの巨大な奴の事だろ？」

「はい、そうですよ」

記事には「巨大生物、妖怪の山に現る！」という内容で写真も撮られており微かだが巨大な角と頭が写されていた。

「何かの見間違えじゃないの？」

「いえいえ、私も見ましたから間違いありませんよ」

その言葉を否定しそれを表すかのように手をぶらぶら振る。

「ホントかしら」

「間違いありません！」

「近いわよ！」

ズイツと顔を近付け至近距離から目を見て真実だと伝えようとする、そんな文を霊夢は肩を掴んで力一杯強く押し距離を離す。

「それが本当だとしたら大が付くほどの異変だぜ？」

幻想郷では事件や怪奇現象等の事を異変という言葉で表す、機械人形、つまりロボットや巨大生物が現れた事も立派な異変である。

「…………それで、その巨大生物が現れた場所って」

やる気が出てきたのか、もしくは好奇心からなのか、巨大生物が現れたという妖怪の山へ行く気になったらしい。

「ですがね」

幻想郷には数多くの妖怪が生息している、その中で山の妖怪達は縄張り意識が高く独自の社会を気付いているため余所の妖怪が関わる事や人間は立ち入る事を良くは思っていない。

「散々人に興味を湧かしておいてそれはないわよね？」

「そうだぜ」文

今度は魔理沙も一緒に二人で顔をズイツと近付け。

「わかりましたわかりました！ 案内しますから！」

ようやく折れ黒い羽根を広げ飛翔する文の案内の下、霊夢と魔理沙は妖怪の山へ飛ぶのだった。

その頃、ウルティメイトゼロとジャンナインは青い光が流れる空間の中を飛んでいた、助けを求める声がする方向に向かって。

「ジャンナイン！ 離れるなよ！」

「わかった」

二人はアナザースペースを抜けいくつもの宇宙が泡のような形状をし浮かんでいる空間、マルチバースに突入した。

ウルティメイトイージスは時空超越能力を持つ伝説の超人、ウルトラマンノアの力が宿っているためウルティメイトゼロと共にいれば別の宇宙へ行く事ができる。

「この中のどれだ？」

途中で止まりゼロは感覚を研ぎ澄ませ声が聞こえる方向を確認する。

「こっちだ！」

方向を変え再び動き出した。

「ジェアッ！」

「ジャンファイト！」

二人は飛ぶ、助けを求める声のために……………

幻想郷、霊夢、魔理沙、文は妖怪の山に到着し巨大生物が目撃された場所の上を浮遊していた。

「ここです、ほら、地面が掘り返された跡と木々が押し折られた跡

も」

文のいう通りその場は地面が掘り返され木々が圧し折られた跡が残っていた。

「誰かが弾幕ごっこしたんじゃないの？」

弾幕ごっこはこの幻想郷で行われる決闘でスペルカードという物を使う、その気になれば殺傷もできるが通常は非殺傷。

「してもこんな人にはなんねーと思うぜ？ わたしみたいな高火力の弾幕使わないかぎり」

魔理沙の弾幕は火力が強いため彼女の推測で霊夢も納得した。

「なるほど………確かにね」

一度地面に降りると三人を呼び掛ける声が響いてきた。

「早苗じゃない」

緑色の髪でカエルとヘビの髪飾りを付け白と青の巫女服を着た少女、東風谷早苗（とうふうや さなえ）が飛んでやってきた。

早苗も地面に降りる、手には何か分厚い本を持っておりページを開く。

「さっきの号外を見て思い出したんです！」

全員何？、という目で注目していると目的のページを見付け見せ付けた、それには一本の長い角に黒い体、長い尻尾を持つ生物が

載っていた。

「あの写真に写ってた角、凶暴怪獣アーストロンの物だったんですよ！」

アーストロン？、聞き慣れない名前を聞き疑問符を浮かべていると。

「凶暴怪獣アーストロン、身長60m、体重2万5000t、棲息地、朝霧火山付近、能力は口から吐くマグマ光線とスラッシュホーンと呼ばれるかたく鋭い角、聴覚や視力が発達していてその耳の良さで二回目に出現した別の個体が宇宙凶険怪獣ケルビムが放つ誘導音波を聞き取ってしまい操られてしまった事がある怪獣です！」

説明をし終えた早苗からは達成感が感じられたが三人はそれが？、という目だったのだが。

「その怪獣の角があの号外に載っていたって事はですよ、この幻想郷に怪獣が棲息しているという事です！」

「外の世界の生物がねえ……………」

幻想郷の結界から出たら日本であり外の事は外の世界と呼ばれている。

「このアーストロンはとてつもなくその名の通り凶暴で防衛チームがなんとか倒した怪獣ですね」

図鑑には「MAT」、「GUY S」と記載されておりこのチームがアーストロンと交戦したと記されていた。

「テレビの中じゃウルトラマンジャックとウルトラマンメビウスが倒したんですけどね」

また聞き慣れない名前が出たため疑問符を浮かべた。

「ウルトラマンは外の世界の空想の中の存在で悪い怪獣や宇宙人と戦い良い怪獣や宇宙人には手を差し伸べて救う正義のヒーローなんです」

「だけどそれっていないと同じじゃねーか？」

魔理沙にそう言われてしまいしょんぼりとなるが。

「ですがこのウルトラマンが生まれたおかげで希望を持って生き続けられた人もいっぱいいるんですよ？」

負けじと次の言葉を述べていくがこのままでは埒が開かないだろうと思ひ霊夢が会話を終わらせた。

「とりあえずそんな危険な奴がいるんじゃないわ、早く見つけて退治しましょ」

「これはいい記事が書けますね」

退治すると言ひ出したため文は次の記事のネタができたと感じニヤリと笑いカメラを持つ。

「だけどどこに行ったか判らねーんだよな……」

だがアーストロンがどこに行ったか判らないため何もできなかった。

「早苗、どうすれば怪獣って見付けられるの？」

「怪獣も動物と同じで何か考えるか本能で行動していますから……
：アーストロンなんて地球温暖化が原因で眠りから覚めて本能で行動していましたし………」

結果、判らないという事だった、困り果てていたその時だった、突然大きな地震が起こり大地を揺るがす。

「じ、地震!?!」

一旦空を飛び辺りを見渡していると大地が割れて木々がその地割れに呑み込まれていくのが見えた。

「もしかして………」

地割れから砂塵が吹き上がり大きな鋭い角が上がってくるとすぐにその角を持つ主の黒く巨大な姿を現し地上に足を付いた。

「凶暴怪獣アーストロン！」

「アレが！」

それが凶暴怪獣アーストロンであった、文は初めて見るものに目を輝かせながらシャッターを切り撮影していく。

「ギャオオオオオウ!!!!!!!!!!」

アーストロンは遠吠えを上げると口からオレンジに輝く熱線、マグマ光線を放ち辺りの木々を焼き尽くしていく。

「おいおいコイツ止めなかったら山火事になるぜ！」

その言葉通り火はだんだんと燃え広がっておりこのままでは大災害となってしまう。

「なんとしてでも止めるわよ！」

霊夢が呼び掛けると肯定する返事が返ってきた。

霊夢は数枚お札を出し両手で持ちそれをアーストロンに投げ付けていく、一見すると紙を投げているが特別な力が込められているためダメージはちゃんとある。

「ガゴオッ!？」

右肩にお札は直撃しよろめくがバランスを整え霊夢に目がけマグマ光線を発射したがいとも簡単に避けられ再び攻撃を食らい痛みにより瞼をギュツと閉じ片目だけを開いて霊夢を睨むのだがアーストロンの敵は彼女だけではない。

すると背中に火花が散った、背後に飛んでいたのは魔理沙、ミニ八卦炉やつけろという道具を使用し攻撃を放ったのだ。

「ググ…………ギシヤアアアッ!!!!!!」

振り向きまた攻撃を繰り出すが即に魔理沙はおらず。

「足を狙ってください！ 巨大生物が共通する弱点は足です！」

巨大生物はその重い体を支える足が弱点である、その支えている足を攻撃されるとバランスを崩す、早苗は元々外の世界出身、怪獣の共通の弱点を知っていてもおかしくはない。

「足か……そのデカイ図体を支えているなら痛えだろうなあ！」

アーストロンの足に向けレーザーとお札が放たれ直撃。

「ギシヤアアアアッ！！！！！！？」

直撃した瞬間、痛みによりバランスを崩し足と手をバタつかせながら苦痛の叫びを上げながら大きな音を立てて地面に背中から倒れ込む。

「これはいい絵ですね！」

カシヤ、カシヤ、とシッターを切っていく文。

「魔理沙さん！ 殺^やる気で攻撃しないと倒せませんよ！」

「わかったぜ！」

倒れ込んだアーストロンの真上に行きミニ八卦炉を真下に向け。

「恋符、マスタースパアアアアアアアーク！！！！！！！！！！」

それから太いレーザーが放たれアーストロンの腹部に直撃し断末魔のような叫びを上げ手足をばたつかせ苦しみを表す。

「このまま一気に！」

マスタースパークはもっと太くなりアーストロンを呑み込み大きな衝撃が走る。

「魔理沙やりすぎ!」

その声は届かず攻撃が止まるとそこにはアーストロンは居らず、消滅した。

「やったぜ!」

「おおう!」

シャッターを切っていく文、アーストロンが倒された跡はクレーターができており確実に消滅したのを物語っていた。

「これで終いだな」

「まあこれはやりすぎだと思うけど」

クレーターを見て腰に手を当て呆れながら言う。

「外の世界でもこんな感じですよ」

だが、怪獣の驚異はこれだけではない事をまだ霊夢達は知る由もなかった。

TO THE NEXT STAGE

STAGE 2 幻想郷（後書き）

因みにネクサス出ます、カップリングはゼロ×霊夢かなあ？
ネクサスはネク×文（え？
グレンとナイトは決まっています。

次回予告

霊夢

「アレで終わってくれればいいのに……………」

ゼロ

「迷ったあ！」

????

「継夢と申します」

早苗

「アレは……………ベロクロン！」

ベロクロン？

「ガオオオオッ！……！！」

ゼロ

「この世界か！」

次回『STAGE 3 光の巨人』

STAGE 3 光の巨人（前書き）

最初ネタが入ります、ウルトラ好きなら分かるネタです。

登場怪獣

ミサイル超獣ベロクロン

登場

STAGE 03

光の巨人

「こころやねええええええええええつ！！！！！」

「ゼロ……まさか迷子に？」

ゼロとジャンナインは迷い、声が聞こえる宇宙ではない所に入ってしまった、目に入っただのは横浜の港に止まっているはずの日本丸と四機の戦闘機が宇宙を航行しているところだったがすぐにイージスの力を使いその宇宙から出てマルチバースに戻った。

「ダイゴ、今何か見えなかった？」

「気のせいだと思うよレナ」



ゼロ達が目指しているはずの宇宙にある幻想郷、博麗神社の縁側で霊夢はアーストロンを退治した事が記事になっている文々。新聞を読んでいた。

「アレで終わってくれればいいのに……」

幻想郷の平和を考えればもう怪獣は出現しない方がいい、そう考えており新聞を置いてお茶を飲む。

「……………ウルトラマンか……………本当に居ればいいのにそんな正義のヒーローが」

ボソツと呟いた、空を眺めながら、眺めていると黒い影が見えた、魔理沙か文のどちらかがやってきたのかと思い待つと前者の方だった。

「よ、霊夢」

「何しにきたの？」

「昨日の話をな」

昨日だと怪獣の事しかない、話を聞く事に。

「結構疲れるわよね」

「ああ、初めてだからな」

アーストロンとの戦いの後、霊夢達はぐったりしていたのだ、今は昼前、実は霊夢も魔理沙も先ほど起きたのだ。

「文なんて寝坊したみたいで急いで新聞配りに行ったみたいだぜ」

よくよく空を見ると黒い影が行ったり来たりしていた、恐らくそれが文だろう。

「だからあんなに焦って渡したら飛んでったのね」

文々。新聞があるからここにも来たのは分かるが一瞬なためちや

んと話してはいなかった。

「外の世界にはあんなのが大量にいるのよね……………本当苦労してるわね」

だな、と返すと。

「ども〜清く……………正しい……………射命丸で〜す〜」

新聞を配達し終えぐったりした文が縁側の方に降りてきた。

「相当お疲れのようね、お茶飲む？」

「お、お願いします……………ハア……………ハア……………」

縁側に座り込むと腕を挙げて背伸びしストレッチしたりと体を解しているとお茶が入った湯飲みを渡されゆっくり啜り飲んでいく。

「ありがとうございます霊夢さん」

「いいわよ、アンタ昨日戦ってないのになんで寝坊なんてしたの？」

「あやや……………未知との遭遇でしたので記事の内容に戸惑ってしまっています〜」

それで徹夜で新聞を書き終え少しだけと思ったら爆睡していたと。

「そういう事……………確かに、私達から見ても常識はずれな奴を記事にしようとしても戸惑うわね」

お茶を啜っていきながらせんべいも食べる。

「はい……………もう少し調べてみようと思います、まだ何かあると思

うので」

お茶を飲み終え立ち上がり礼を言おうと黒い羽根を広げ飛び立った。

「熱心ね」

「ああ」

ゆっくりと飛行する文、この速度を維持するため羽根を上下に一度動かす。

「もう一度アーストロンが出た場所に……………ん？」

急に影に被われ雲に太陽が隠れたのかと思い見上げると一刻と迫る一つの人影。

「こっちに落ちて……………あややあっ!？」

回避に間に合わず人影と激突し共に落下し地面に落ちる。

「いたた……………もう一体何なんですか！」

痛む頭を押さえながら自分と激突したものを見る、その人物は空色の髪で後ろで止めた空色の瞳の青年だがメイクによれば美しい女性にも見えダークブルーの制服を纏い背にNRと書かれ何か重そうなカバンを持っていた。

「あだだ……大丈夫かあ？」

「あやや……大丈夫です……って外来人？」

青年の容姿から見てすぐに外の世界から来たのが分かりその言葉を口にし男は疑問符を浮かべた。

「外国人じゃなくて俺は日本人だ」

聞き間違えたらしくそう言ってしまう。

「あやや、そういう意味ではなくてですね……」

話しても大抵は信じてもらえないが説明しないわけにもいかない。文はこの青年に幻想郷について簡単に説明をした。

「そんな所に俺は来てしまったのか……」

あっさり信じた。

「外にバミューダ海域や獅子鼻樹海って言う空間が不安定な地域があるからな……」

この二つの地域は外の世界では世界の七不思議にも入っているスポットで行方不明者が多発している。

「それは興味深いですね……今度ぜひ取材を……とすみません」「いいよ別に、俺が落ちてきたのが悪かったんだからさ」

言葉的に違和感がある、なぜ人間が空から落ちてきたのか。

「俺もあまり分かんねーんだよ………気付いたら落ちてたし」

本人も分からず原因は不明、関わってしまった以上昨日の現場に行く前に青年を外の世界へ帰す事ができる博麗神社に案内するため一緒に着いていく事。

「まあ帰しちゃえばどうって事ないですからね、自己紹介がまだでした、私は射命丸文です」
おおぞら つぱい

「俺は**大空継夢**、ナイトレIDER Bユニットの隊員」

ここでは聞き慣れない名前だが外の世界で主に異星獣スペースビーストを退治する組織^{テイルト}TLT直属の防衛チーム、ナイトレイダーの事である。

「歩きながら質問してもいいですか？」

「いいぜ？
なんでも聞きな」

怪獣の事を色々調べたかったため継夢の来訪は丁度良く職業上取材せずにはいられなかった。

その頃、ゼロとジャンナインは。

「こちもちげえええええええええええつ！！！！！！」

目的の宇宙に着けずにおり前を三機のSRCとマークが描かれた巨大なロケットが航行していた。

「いつになったら着けるんだゼロ？」

「今度こそ……………」

マルチバースに戻り意識を集中する、考えるのではなく感じる、ウルティメイトイージスが使用できるエネルギーは残り僅かとなってきたためここで目的地に着けなければ当分イージスが使えず時空間移動ができなくなる。

「今度こそ頼むぞゼロ」

返答する事なく意識を集中し頭の中に響いてくる声を聞く、そして感じる、どこから響いてくるものかを。

「……………」

ウルティメイトイージスとウルティメイトゼロソードのクリスタルが輝く、そして胸部のクリスタルから一筋の光が放たれた。

「っ！ コイツに着いていけば！」

動き出しジャンナインはその後を着いていく。

ゼロはその光に引っ張られている感覚だった、自分が動いているのではなく。

「ジェアッ！」

ジャンナインも包み込む光が放出されていくと一気に光速を越えウルティメイトイージスに導かれていった。

先ほどゼロとジャンナインが迷い込んだ宇宙を航行していた巨大なロケット、コスモ・ノアに乗る宇宙飛行士はその二人を見逃していなかった。

「今のは…………ウルトラマン？」

太陽のように輝く短い金髪で月のような優しい青色の瞳を持った青年は呟いていた。

そして場所は幻想郷に戻る。

「あ、俺からも質問いい？」

質問されていた継夢は逆に質問をした。

「いいですよ？」

「さっき黒い羽根が見えた気がしたんだけど……………」

「ああ、これですか？」

見せびらかすように己の背の黒い羽根を広げ動かす。

「私は鴉天狗ですから、空も飛べますよ」

普通なら驚いてるはず、だが継夢の反応は他とは違い憧れと羨ましが混ざった眼差しだった。

「驚かないんですね」

「驚いてる、けど……羨ましい、自由に飛び回れるなんて」

名字の通りなのか、大空に憧れを抱いているようだった。

「けどこの幻想郷じゃ狭いですよ、結界に被われたこの幻想郷じゃ」

大空をただ飛びたい継夢に対し文はもっと広い空を飛びたいという思いがあった。

「だけど、飛べるのはいいじゃん、人間は鉄の箱に入らねーと飛べねーんから」

残念そうに言う、風を体で感じたい、継夢の場合はその思いが強かった。

「あ、もうそろそろで着きますよ」

羽根を閉じ歩いていると階段が見えてきた、博麗神社へ続く階段が。

「ここ登れば博麗神社ですよ」

階段の前に立ち上にある鳥居を見上げ一段ずつ上がっていく。

「サンキューなここまで」

「いえいえ、貴重な話を聞けましたし」

「ところでさ、この幻想郷にも怪獣が出てるのか？」

文の質問のほとんどが怪獣についてだった、それが気になりまた質問を試してみた。

「ええ、昨日アーストロンという怪獣が」

「そうだったのか……」

境内に上がるとそこに霊夢はいない、縁側に居るのだと思い回り込んでみる。

「あれ？　いない？」

だがそこにも居なかった。

「文？」

「どうやら留守みたいです、少し待ちますがいいですか？」

「全然構わねーよ」

男の笑顔だが女の笑顔にも見えやはり美人という言葉が合う青年、女である文は少し嫉妬していた、文も美人の類に入るが相手は男だからである。

（美人過ぎる……男なのに……男でも女でもどっちも通る……
…）

だんだん目がジト目となってきた。

「どうしたんだよ文？」

「あややや！？ なんでもありませんよ！」

慌てて返事を返した瞬間だった。

ドーン！ 、と爆発音が鳴り響いてきた。

「爆発！？」

その音を皮切りにドドドド！ 、と連続で爆発音が鳴り響く。

「…………アッチだ！」

継夢はどこからか響いてるか聞き取り走りだす。

「あ！ 待ってくださいよ継夢くん！」

後を文が追い掛けていった。



文と継夢が博麗神社を目指し移動していた頃、霊夢は縁側でお茶

を飲んでいた、その頃には魔理沙も帰っており一人でいた。

「静かになったわね……………」

かなり暇そうだった、何か起きないか、怪獣以外の事でだが。

「……………寝よう……………」

そのまま後ろへ倒れようとし背が床に付きそうになった瞬間一気に起き上がった。

「今何か……………変な悪寒が……………」

境内とは逆方向から何かを感じそれが気になり宙に浮きその気になった方向へ飛んでいった。

「スキマのような感じにも似てるけど、違う」

同じ方向へずっと進んでいると空に亀裂が入っていた。

「スキマじゃないわね」

空間に隙間を開き移動する境を操る妖怪がいるがその妖怪が作ったものではなかった。

空に入る線は細い隙間から赤い光が零れていた。

「何が出るの……………」

そして亀裂が入っていた空はガラスのように割れ赤い空間の中から無数のミサイルが放たれた。

「ミサイル!？」

そのミサイルの弾幕を掻い潜り流れ弾が地上に直撃し爆発、これに二人が気付いたのだ。

「中に何が……………」

空に開かれた空間の中、その中から巨大な黒い顔が怪しく輝く眼で外を覗き霊夢を睨んでいた。

「怪獣!」

そらに空を割りその全体の姿を露にし中から出て地上に降り立った、背中に赤い珊瑚礁のような突起が無数生え、鋭い爪を持つ宇宙怪獣と珊瑚礁を合成させた怪獣兵器、ミサイル超獣ベロクロンだった。

「ガオオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!」

ベロクロンは背中 of 突起から無数のミサイルを発射し霊夢を狙っていた。

「くっ!」

それをまた掻い潜ってくが今度は追尾機能が付いておりUターンし襲ってきた、方向を変える際にミサイル同士が激突する事もあったがさほど数は変わらなかった。

「ガオオオオオオウ!!!!!!!!!!!!!!」

指からも追尾機能を持たない連射性に優れたミサイルを発射していき弾幕の密度を濃くしていく。

「これでも！」

御札を連射するのだがミサイルが盾代わりになりベロクロンには直撃せず爆発しその爆風で吹き飛ばされてしまった。

「ぐっ!?!」

大木に背中から激突しずるすると落ちベロクロンを見上げる。

「強い……昨日のアーストロンが弱く思える」

超獣は怪獣よりも強い怪獣兵器である、そう思えるのは無理もなかった。

「魔理沙達もいたら少しはマシだったかも」

立ち上がろうとするのだが激突した衝撃の痛みにより体が言う事を聞かなかった。

ベロクロンは霊夢を見下しゆっくりとその巨体を動かしていく。

霊夢はここまでかと思った、自分が死ねば幻想郷のバランスが崩れ大変な事になる、諦め切れぬがどうすればいいか思い付かなかった。

「あやや!?! 霊夢さん！」

近くに文と継夢がやってきた。

「アレはミサイル超獣ベロクロン！」

「アレも怪獣……………」

特に早苗は超獣ではなく怪獣だとうるさそうだが今はそんな事を言っている暇はない、ベロクロンの魔の手は一刻と迫っているからだ。

「これはマズいです！」

文は黒い羽根を広げ飛び立とうとしていた、継夢は持っていたカバンを開け銃口が二つある大きめの銃と銃口が一つの小型銃を出し変形させ一つの大型銃として連結させディバイトランチャーを完成させた。

三つの銃口をベロクロンに向け引き金を引き光弾を発射し肩に直撃し火花が散る。

「早く行け！ 俺が食い止める！」

「わ、分かりました！」

文を霊夢の下へ向かわせると走りだしベロクロンの注意を自分に向けるように光弾を発射していく。

「ガウウウツ！！！！！」

思惑通りベロクロンは継夢に注意が行き眼からレーザーを放ってくる、過去の個体にはレーザーを打つ能力はないが兵器であるため日々強化され続けているのだろう。

レーザーの雨を走って掻い潜っていく継夢、木の陰に隠れベロクロンに光弾を直撃させまた走りだすとヒットアンドアウェイを繰り返す。

返す、その間に文は霊夢の前に降り立つ。

「大丈夫ですか!？」

「ええ………ギリギリね」

肩を貸し一緒に飛び立つとベロクロンはそれに気付き後ろを向いたまま突起からミサイルを連射し追撃する。

「あやや!？」

文はミサイルが迫っているのに気付き飛行速度を上げて振り切ろうとする。

「注意向けてもあまり意味ねーじゃねーか!」

毒づきながら走りレーザーとミサイルの弾幕を避けつつ攻撃を加えていく。

「こんなミサイル、私の風で!」

文は風を操る程度の能力を持っている、それを活かしたスペルカードを使う、霊夢は空を飛ぶ程度の能力、魔理沙は魔法を使う程度、早苗は奇跡を起こす程度である。

「風符、天狗道の開風!」

発動を宣言すると目の前に竜巻が発生しミサイルはそれに呑み込まれていき次々と爆発するがその衝撃で竜巻も消滅する。

「まさか竜巻まで消滅するとは………」

「……っ！ 文、後ろ！」

振り向くと生き残ったミサイルが迫っていた、反応に遅れたため
万事休すかと思われた。

継夢は何もする事ができなかった、このままではミサイルが直撃し二人が、と思われたその時だった。

大きな掛け声が空から響いた、するとその空から青白く光る閃光が落下し二人の盾となりミサイルを防いだ。

光が消えるとそれはウルティメイトゼロソードと合体し弓状の武器となったウルティメイトイージスだった、だがクリスタルの輝きは消えており、そして掛け声と共に何かが急降下しベロクロンを炎のキックで蹴り飛ばした。

ウルティメイティーズは光の粒子となり左腕にウルティメイ
ブレレットとなり装着された、そうそこに駆け付けたのは……

ウルトラマンゼロだった！
隣にジャンナインが降り立つ。

「ミサイル超獣ベロクロンだ、ヤプールが作った怪獣兵器の」

軽く会話していると継夢と文、霊夢は合流。

「継夢くん、アレは？」

「テレビの中の存在だと思ってた………だけど、本当に、本当に居たんだ………」

憧れの眼差しを向けていた、空想でしかないと思っていたのに。

「ウルトラマン………ウルトラマンゼロ！」

名前を叫んだ瞬間ゼロは右手を伸ばし手のひらを広げ拳法のような構えを取る。

「ジャンナイン、お前は後ろの奴ら守ってろ、ここは俺がやる！」
「ああ、分かった」

ジャンナインが下がるとゼロは走りだしベロクロンに掴み掛かった。

「デヤアアアッ！！」
「ガオオオオオッ！！」

取っ組み合いとなり一回、回転するとベロクロンの鼻先に手刀を

二発叩き込み押すと体を回転させ右足を引いて思い切り伸ばしキックを炸裂し遠くへ飛ばした。

「デエエエエ………!!」

ゆっくり構えるとベロクロンは立ち上がり指と眼からミサイルとレーザーを連射し攻撃を仕掛けるがゼロは両手を突き出し半透明の紫に輝く壁、ウルトラゼロディフェンサーで受け切り緑色の光弾ビームゼロスパイクを放ちカウンターを食らわす。

「ガゴオオオオオオオツ!!!!!!」

口から火炎放射を放つ、だがゼロはなんとそれを足を上げてそれに当てその炎を纏ってしまった。

「なんちゅー無茶な防ぎ方なの」

若干呆れていた、ミサイルを防いだようにバリヤーを張ればいいのに。

ゼロは片足だけで飛び上がり急降下し炎を纏った方の足を突き出しウルトラゼロキックを直撃させベロクロンは当たった場所から火花を散らしながら吹き飛ばされ地面に付くが滑るようにし勢いよく下がっていく。

「ふう………立てよ」

ゼロは挑発するように人差し指を動かす、ベロクロンはそれに大きく反応しミサイルを乱射し四方から襲い掛かる!

「危ない!」

文は思わず声を上げたがゼロは鼻で笑った、体を回転させながらゼロスラッガー一つ二つと投げ飛ばし回りを乱舞しミサイルを落としていく。

「あのブーメラン、すごい！」

頭にゼロスラッガーが戻るとベロクロンは口から二発ミサイルを発射した、それをエメリウムスラッシュで打ち落とす。

「デアッ！」

そしてもう一発エメリウムスラッシュを発射しベロクロンの口内に直撃、火が上がり屈み姿勢を低くし悶え苦しむベロクロン。

ゼロは一気に叩き込もうと考え接近するがそれは大きな油断に繋がった。

「デエエエッ!!!!!!!!!!」

ベロクロンは薄いオレンジに光る輪を放ちゼロを拘束したのだ。仕返しと言わんばかりにゼロに打撃を加えダメージを与えていく。

「ぐわあっ!?!?　ぐうっ!?!」

ベロクロンはゼロを蹴り飛ばしミサイル攻撃で更に苦しめていくとカラータイマーが青から赤へと点滅を始めた。

「なんかピコピコ光ってるわよ」

「アレはカラータイマー……………ウルトラマンは地球上じゃ3分しか戦えない……………もし3分過ぎれば……………」

「過ぎればどうなるんですか？」

苦しむゼロを一回見て。

「死ぬ……カラータイマーはウルトラマンの命の輝きなんだ」

立ち上がったゼロに鋭い爪による攻撃を繰り出しゼロの体に火花が走る。

「ゼロ！」

ジャンナインは右腕のシールドに装備された二門の砲門、ジャンキャノンから青いレーザーを発射しベロクロンを攻撃し援護。

「余計な真似すんじゃないねー」

「強がって、余計な真似だったか？」

内心は感謝しているがやはり一人で倒したかったのだろう、文句を言うがこのチャンスが無駄にしない。

「さあて……ブラックホールが吹き荒れるぜ！」

そう叫ぶとレーザー攻撃に怯むベロクロンに突撃しラリアットを食らわし押し倒すとマウントを取り殴り込む。

「おらよっと！」

最後に一発殴り立ち上がるとベロクロンを頭が下を向くように持ち上げ一気に地面に落とすゼロドライバーを炸裂、手を放し側転しながら離れる。

「ジェアッ！！！！！！！！」

腕をL字に組みワイドゼロショットを発射、立ち上がると同時にベロクロンの胸部に直撃。

「ガゴオオオオオオ………」

光線が止まるとベロクロンは仰向けに倒れ瞳から輝きを失い絶命した。

「すごい力……………」

「ああ！ カメラに収めるの忘れてた！」

戦いに見惚れいいネタだったのにカメラでの撮影を忘れていた文、それほど熱中していたのだ。

ゼロはだんだん小さくなっていき姿を消した、ジャンナインは移動しゼロが消えた場所へ、霊夢達はそれを追い掛けた。

「人間の姿になんねーとキツいか」

ゼロは銀髪の黄色の瞳を持つ白い衣服を纏い腕にウルティメイトブレスレットを嵌めた青年へと変わっていた。

「ウルトラガンがあれば十分か」

ベルトにぶら下がっていたガンホルダーを見て眩くとジャンナイ
ンが近付いているのが森の中から見え前に霊夢達が。

「アンタが…………ウルトラマン？」

正体は明白だった、バレているのなら隠す必要はないため頷い
た。

「俺達はこの宇宙から助けを求める声を聞いてやってきたウルティ
メイトフォースゼロだ」

継夢はその名前に聞き覚えがありジャンナインも見覚えがあった。

「本当に居たんだウルトラマン……………」

その言葉でゼロは何らかの形でウルトラマンが存在しているのを
理解した。

「ああ、俺の名前は…………ウルトラマンゼロ、この姿じゃあ……………」

考えた、この姿でゼロと名乗るのも味気ないと、ならば名前を考
えた。

だがその名前を考え始めた一瞬がヒントだった、この刹那、ゼロ
が思い付いた名前、それは…………

「もろぼし…………せつな……………そうだな、刹那、もろぼし せつな諸星刹那って名
乗るぜ」

鼻の下を親指で掻く仕草を見せこの姿での名前を諸星刹那に決め
たのだった。

TO
THE
NEXT
STAGE

STAGE 03 光の巨人（後書き）

次回もサーガに出る怪獣と思いましたがやめました、刹那ですが容姿は勇者様似です、継夢の空への憧れと容姿はマクロスFの早乙女アルトがモデルです、途中に出た宇宙飛行士は流星的なロックなのです。

次回予告

霊夢

「理解が早くて助かるわ」

継夢

「考えさせてくれないか？」

文

「あややや？」

刹那

「この宇宙で一体何が……………」

早苗

「宇宙大怪獣ベムスターにミサイル超獣改造ベロクロンですよ！」

刹那

「デュワッ！」

次回『STAGE 4 宇宙大怪獣参上！』

STAGE 4 宇宙大怪獣参上! (前書き)

前回に引き続きまたもやベロクロン登場、ベロクロン率高いのはサ
ーガに出ますので)

登場怪獣

宇宙大怪獣ベムスター

ミサイル超獣ベロクロン二世

登場

STAGE 04 宇宙大怪獣参上!

前回、外の世界から大空継夢が幻想入りしベロクロン出現により
霊夢達は窮地に立たされた、

その時、別の宇宙からウルトラマンゼロとジャンナインが駆け付け
ベロクロンを撃破、

ゼロは人間での姿を諸星刹那と名乗る事とした。

「ここは幻想郷って地球の日本のどっかにある不思議な空間って事
か」

「理解が早くて助かるわ」

博麗神社の居間、そこで刹那と継夢に幻想郷について詳しく説明
していた。

「で、アンタとあのロボットはなんでこの幻想郷に来たの？」

自分達が教えられる範囲の事は話した、次は刹那の番であると話を
振るう。

「声を聞いたんだ」

声？、継夢も揃えて声を上げた。

「助けを求める声をな、俺達はそれを頼りにしてこの宇宙にやって

きたんだ」

自分も話せる範囲を話した、ウルティメイトフォースゼロ、宇宙警備隊、並行して存在する様々な宇宙などを。

「本当にあったのか……宇宙警備隊もウルティメイトフォースゼロも」

その中で継夢はまだ信じられないという感情が露になり口に出していた。

「この宇宙じゃ俺達はいるのか？」

俺達、ウルトラマンはいるのか、と言う意味だ。

「ウルトラマンは空想の中の存在で現実には居ないはずだった……けどこうして目の前にいる」

信じるざる得なかった、今回自分が体験している事、幻想入りをし幻想郷で怪獣と出くわし更にウルトラマンが現れた事を。

「アンタとあのデカイのは自分から幻想入りしたという事なのね」

「ま、そう言うこった」

霊夢の話に答えていると文がカメラで撮影しているのは放っておいた。

「だけど」

すると継夢の方を向き。

「アンタは自分の意志でここに來た訳じゃないから外の世界に帰すわね」

刹那と違い彼は神隠しというところある妖怪がたまに起こす現象で幻想郷に來てしまった、そんな継夢みたいな人間を外の世界に帰すのも博麗の巫女の仕事でもある。

「……………」

だが帰れるのだがそれを喜ばない継夢、何か悩んでいる様子だった。

「あのさ、もう少し残させてくれねーか？」

幻想入りする人間には二つのパターンがある、すぐに帰りたいか現実が嫌でここに残る人間、

だが、彼の場合は両者とも当て嵌まらなかった、現実が嫌という訳でもないのは明白だった。

理由を聞いてみる事にした、その理由はここに連れてきた文も、刹那も気になっていた。

「怪獣が現れた事がないこの幻想郷に怪獣が現れた、もしかしたらベロクロンだけではないのかもしれない、

刹那からの話を聞けばまだ沢山の怪獣が出現するかもしれない、俺はその驚異から人々を守る仕事に就いた、もし出現するならば残ってここが落ち着くまで戦う」

それは自分の職務に誇りを持つ者の言葉であり決意だった。

「いいのかしら？　ここはアンタがいる世界とは違うのよ？　関係ないのよ？」

できれば巻き込みたくない、そんな思いから出た言葉だったが。

「関係なくない、ここも地球の一部ならそこも守る、それが防衛チームだ」

目付きが鋭かった、どうしても残る、そんな決意が見えていた。

「ならもう何も言わないわ」

「ありがとう」

ここまで連れてきた文は最初の印象は女性顔の綺麗な男だと思っていた、だが真っ直ぐで自分の仕事に誇りを持つ青年だと分かった。

（結構カッコいいじゃないですか）

もう一つは空に憧れを抱く青年という事、もっと広い空で飛びたい自分と想いが一緒な点があった。

「じゃあよろしくな継夢」

「俺の方こそな刹那」

刹那はこの宇宙に来て協力し怪獣と戦ってくれる仲間ができた事に喜びを感じていた、そのため手を出し握手を求めると継夢はそれに応じる、するともう二つ手が。

「これから一緒に幻想郷を守るんだから、私もよろしくね」

「これからのいい記事が書けそうですからよろしくお願いしますね」

一人の目的は少し違うがいい協力者となりそうだった。

「俺もよろしく頼む」

外の方からジャンナインの声が響いてきた。

「そうだなジャンナイン」

刹那はニツと笑いこれから先、何が起きても乗り越えてやるという意を持っていた。

「じゃあお前らもウルティメイトフォースゼロのメンバーな」

勝手にメンバー入りをさせようとしたが。

「なんでそうなるのよ」

「そうですよ」

「俺はナイトレイダーの隊員だし」

全員からダメ出しを食らい間が抜けた表情となりカクツとなる。

「誰でもメンバーに入れるのはどうかと思うが？」

即ちメンバー入りを果たしたジャンナインにもダメ出しをされた。

「俺に味方はいねーのかよ！」

助けを求めるように声を上げていた。



その頃。

「あの爆発音、博麗神社からだったよな」

爆発音を耳にした魔理沙は霊夢を心配し箒に跨り博麗神社を目指して飛行していた。

「あ、魔理沙さん」

すると早苗と合流した、恐らく目的は一緒。

「早苗もか？」

「はい、かなり大きな音で煙が上がるところも見たと里の人から聞いたので」

幻想郷には人間が住む人里があり、妖怪も人間もよくそこで買い物をしたりしている。

「なるほどな………にしてももう夕暮れ時か」
「そうですね」

昼過ぎまで寝ていたため朝から起きているよりも進む時間が短い
思っていた。

「夕日を背にして立つウルトラマン、カッコいいんですね」
「まーたその話か」

飛んでいると目の前で沈む夕日に突然罅が入った。

「な、なんだ!？」

それにただならぬ異変を感じ静止する二人。

「罅が入る空……まさか!」

その意味を早苗は分かっていた、そして夕日……ではなく空
が割れ異次元空間へと繋がるゲートが出現すると中にはベロクロン
が居るのだがゼロが倒した個体とは異なる姿だった。

「あれも怪獣か!？」

「違います! アレは超獣……ミサイル超獣ベロクロン二世です
!」

異次元空間から完全に外に出て姿を現したのは黒い皮膚が緑色と
なり初代とは違い長い尻尾が生えたミサイル超獣ベロクロン二世だ
った。

「ギャオオオッ!」

もちろん能力は初代と同じように背中の中身のサンゴからミサイルを乱

射する事が可能で撃ってきた。

「なんだよあの数!？」

「ベロクロンは他の生物や兵器と合成させた怪獣兵器なんです!」

「じゃあ怪獣じゃねーか!」

ミサイルの弾幕を避けつつ攻撃の隙を伺うがまったく隙が見えず、マスタースパークでミサイルごと吹き飛ばそうと考えるが早苗に止められた。

「それじゃミサイルが誘爆していつて私達も爆発に巻き込まれます!」

ごっこだったら死なないが、ごっこではない、もしかしたら死ぬかもしれないのだ。

「そっか………これはいつもわたし達がやる弾幕ごっこじゃ………危ねっ!」

目の前にミサイルが迫っているのに気付くと上昇する、ベロクロン二世は魔理沙に狙いを定めたのか、ミサイルで追尾させる。

「魔理沙さん!」

助けようとスペルカードを出すがミサイルを体内で構成できるベロクロン二世は早苗に向けてミサイルを放った。

「キャッ!」

声を立て驚くものもミサイルを掻い潜るが進む事はできず完全に

引き離されてしまった。

上空では無数のミサイルが魔理沙を追尾する、幻想郷で二番目に速い魔理沙だがいつまで保つか分からない、だが考えはあった、追尾するミサイル、どこまでも追ってくる。

「どこまでも追ってくるなら返してやるよ！」

そのまま下に向かって急降下する、その真下にはベロクロン二世が、ベロクロン二世は上を向くと魔理沙に気付き鼻先の二本の角から赤い光線を放つが簡単に避けられる、ミサイルを放とうとするがここでは自分も爆発に巻き込まれる。

「コイツら全部……返してやるぜ！」

ベロクロン二世の真横をまっ逆さまに突っ切ると地面すれすれのところを綺麗な曲線を描き急上昇、追尾するミサイルは間に合わずベロクロン二世に直撃し爆発。

「ガアアアアッ！！！！！！？」

自分のミサイルが直撃するとは思わず苦痛の鳴き声を上げるとそれを見た早苗も。

「こっちもお返しします！」

真横を横切りミサイルはベロクロン二世の胸部に直撃し爆破、直撃した箇所から炎と煙を上げベロクロン二世は瞼を閉じゆっくりと横に倒れ自ら発射したミサイルにより倒れた。

「やりましたね！」

「ああ！」

勝利に喜ぶ少女達、だが驚異はこれだけではなかった。

「クエエエエエエーッ！！！！！！！！」

その鳴き声に気付くと夕日を背にし降り立つ鳥のようにも見え頭に長い角が生え腹には五角形のような物が付いた怪獣が出現した。

「宇宙大怪獣……………ベムスター……………」

その名はベムスター、あらゆるエネルギーを貪り尽くしてしまう凶悪な怪獣だった。

「よく見れば可愛い顔してるじゃねーか」
「外見だけです！ 気を付けてください！ ベムスターは……………つて！」

注意を聞く前に魔理沙はマスタースパークを発射してしまった、すると五角形物が開き星のような形となり中はヌメヌメとしていた、その中にマスタースパークは吸い込まれ吸収されてしまった。

「あれ？」

目が点になった、簡単に自分の得意技が吸収されるとは。

「ベムスターのお腹は口でそこからほとんどのエネルギーを吸収したりしてしまうんです！」

注意が遅いとは思わなかった、自分が聞く前に発射してしまった

からだ、それによりベムスターは更に元気となり角から黄色い光線を発射しだした。

「早苗！ お前は神社行って霊夢呼んでこい！」

「魔理沙さんは！？」

「コイツの注意を引いとく、だからその間に！」

断ろうとしたが本人はその気で耐える自信があった、それを見て折れたため。

「分かりました、気を付けて！」

ここは彼女に任せ自分は応援を呼ぶため博麗神社へ向かった、ベムスターはそれに気付き追い掛けようとしたが背を向けてしまいその背中にレーザーが直撃し火花が散る。

「後ろ向いてちゃ何もできないみたいだな」

ベムスターの弱点が見えた、正面からは光線放ったり腹の口に吸収されてしまうが背中からは何もできない、近付かなければベムスターからは有効な攻撃ができないと判断し後ろに回り込み背中を攻撃するようにした。

「さっきなんか大きな音がしたわよね？」

当初魔理沙達が博麗神社を目指していた目的と同じ理由により爆

発音や何か大きな物が倒れる音に気付き境内に刹那達は出ていた。

「ああ…………こりゃ鳴き声だな」

ウルトラマンの聴覚は人間よりも発達しているため遠くにいる怪獣の声も聞こえるのだ。

「まさか怪獣が……………」

すると境内に早苗が降りてきた。

「どうかしたの？」

魔理沙が今ベムスターと戦っていると伝えたと刹那は戦う決意をし左腕を曲げるとウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイが出される。

「それって！」

早苗も外の世界の人間、そのアイテムに見覚えがあった。

刹那は両手を広げジャンプするとウルトラゼロアイが着眼し同じ姿勢のウルトラマンゼロの姿が重なり元の姿であるウルトラマンゼロへと変身を遂げ飛び立った。

「本当に、本当にウルトラマンが！」

継夢と同じように本当にウルトラマンがいる事に喜んでいると。

「私達も行くわよ、魔理沙が心配だし」

「はい！」

継夢は走って向かおうとするが距離があるため文の腕に掴まって一緒に飛ぶ事に。

「飛んでる……俺は本当にこの空を飛んでる………」

自分の力ではない、だが今こうして飛んでいる事に喜びを感じていたが今はそれどころではないと考え仕事モードに入った。

「チッ、しぶてーな！」

なかなかベロクロン二世のように倒れないベムスターに毒づいていた。

「クエエエエエーッ！！！！！」

角から光線を放つが単純な攻撃のため軽々と避ける。

「背中にマスタースパーク決めて終わりにすつか！」

正直疲れた、そのため発射の準備を進めながら攻撃を避け後ろへ回り込む。

「これで………！」

準備は整った、後は発射すれば終わる、そう思い安心感に満ちた

その時だった！

「ギャオオオオオオッ！！！！！！！！！！」

突如瞼を開き瞳に輝きを取り戻したベロクロン二世が目覚め起き上がり角から魔理沙に向け光線が発射された。

「なっ……………」

このままでは直撃、だが光線は放ってしまい反動で動けず、万事休すかと思われたが。

金色の光が光線を防いだ、ベムスターは空へ飛んでマスタースパークを避けてしまったが自分は助かった。

「なんだよこりゃ……………」

光は人の形になっていき巨人へと変わった、光が消えるとそこに立っていたのは早苗から話を聞いて空想の存在だと思っていたウルトラマン、ウルトラマンゼロだった。

「早苗が言っていたの……………もしかしてコイツが……………」

ゼロは振り向き無事を確認すると突進してくるベロクロン二世に足を突き出して蹴り飛ばした。

「ジェアッ！」

ゆっくりと構えを取ると空からベムスターが奇襲を仕掛けたがそれを足を上げると同時に横に動き足を振り下ろし踵落としを決めベムスターを地面に叩き付けた。

「クエエツ!？」

地面に叩き付けられ怯むベムスター、だがベロクロン二世はそれに構わずガズガと背中を踏み付けゼロに再び突進する。

「学習能力ねーな！」

次は上段回し蹴りで顔を蹴ると腹部に連続でパンチを叩き込み最後の一発、重い一撃を決め殴りベロクロン二世は体がくの字に曲がり後ろへ吹き飛ぶ。

「クエエエエーッ!!!!!!」

ベムスターは立ち上がり怒りをゼロにぶつけようと光線を放ったが手の平で受け止められ、エメリウムスラッシュにより角を破壊されてしまった。

「オラアアアアーッ!!!!!!」

ベムスターの腕を掴んで背負い投げで放り投げると後ろからベロクロン二世が襲い掛かる、だがエルボーを決め込み飛び上がり額に手刀を叩き付け後退させる。

「強え……………」

圧倒的な力を呆然とただ見ているとベムスターが飛翔し角が無くなった頭で頭突きをしゼロの背中に直撃した。

「うわあっ!？」

前へのめるとベロクロン二世の踏み付け攻撃により立ち上がれずカラータイマーが点滅を始めてしまった。

「なんかピコピコ鳴ってるな……………」

ゼロはなんとかベロクロン二世を払い除け横に立つベムスターにキックを繰り出すのだが腹の口に足が呑み込まれしまった。

「ぐわあっ!?!」

苦痛の声を上げるとベムスターはカッカッカッと嘲笑い手の爪で引き裂こうと腕を振り上げたのだが。

「クエッ!?!」

突然爪が破裂した、そして片手も振り上げるがそれは御札が直撃し最後の爪も破壊された。

「ふう……………間に合った」

ベムスターの背後にはデイバイトランチャーを構えた継夢、空を浮遊する霊夢達がいた。

「霊夢に早苗! 文も!」

ゼロは口から足を引き抜くと鼻で笑い闘志がつき夕日を背にして立つと倒れたベロクロン二世の尻尾を掴んで振り回すと投げる、するとベロクロン二世は頭からベムスターの口に突っ込む。

「クエエッ!？」

それに慌てベロクロン二世を出そうとするが遅かった、口が塞がれば光線も吸収できない、だが念には念を入れ横に飛び込み前転し右膝を地面に付け左腕を左へ伸ばしL字に両手を組みワイドゼロショットを発射した。

光線はベムスターの背中に直撃、皮膚を突き破りベロクロン二世の頭部にも直撃すると爆発を起こし二体の怪物は消滅した。

「今度こそ倒されたみたいですね」

「ああ、だけどスゲーパワー、気に入ったぜ」

パワーを求める魔理沙にとって先ほどのワイドゼロショットは気に入る要素しかなかった。

ゼロは両腕を拳にし広げ上に向け曲げるとだんだん小さくなっていき等身大となると刹那の姿に戻るのだった。

TO THE NEXT STAGE

STAGE 04 宇宙大怪獣参上! (後書き)

今回の変身はサーガでのタイガの変身の仕方ですがランの仕方でもやります。

次回予告

ノア

「お前は僕の世界で倒されたザギの破片が集結し生まれたウルティノイド」

ルシフェル

「そう……俺はザギそのものと言ってもいい」

継夢

「やっぱり、自分の力でこの空を飛びてーな」

文

「そこまでなんで空に拘るんですか?」

霊夢

「何よコイツ……」

刹那

「ビースト・ザ・ワン……………」

ネクサス

「飛べる……………俺はこの空を……………飛べる！」

次回『STAGE 5 追跡者―チェイサー―』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8041z/>

東方零物語

2012年1月13日18時48分発行